蝉の鳴く日

http://park2.wakwak.com/~kiss_co/

一日目。

戦争が当たり前のように起き、それを非難できるほどの余裕が人々になかった時代。その土地でもご多分に漏れず、争いが起こっていた。

兵士達は番号で呼ばれ、自分のベッドの上に寝ているのが誰なのか、己の上官が何て名前なのかも見失うほどの混迷を呈していた。夜中にはどこかで起こる爆撃の音と誰かのうなされる声が子守唄だった。

ここにある兵士がいる。彼は特に何か得意なわけでもなく、幸せな家庭を持つでもなく、かといって同情をさそうような不幸を持つわけでもなかった。けれどもその日、誰もやらなかったことをした。

些細なこと。

「なあ、起きているか？」

夜中に響いたそんな声。彼は自分の上

http://park2.wakwak.com/~kiss_00

に寝ている人物に興味を持ったのだった。
周りの兵士たちはその異端な声に一瞬目を開けたが、すぐに耳を閉じた。そんなものを聞く興味も気力ももはやなかった。
「なあ起きているんだろう？」
上の兵士はいつも男が眠る前に三度の寝返りを打つ。ところが今回は彼自身、妙に目が冴えているせいか、ベッドの軋みが何度も耳を刺激した。三回しか聞くことが無いはずなかったそれ。そんなことがきっかけだった。
「・・・眠れないのか？」
囁くような声がした。それはカサカサに乾いていて、時折ひゅうと空気が漏れた音がした。
「ああ、眠れないんだ」
彼は上に言葉が通じる人間がいたことにほっとした。もしかしたらと、思って

http://park2.wakwak.com/~kiss_to/

いたのだ。
もしかしたら。
本当は誰もいなくて、ベッドの軋みすら幻聴ではないかと。そう自嘲気味に言えば、ひゅうと音がした。
「今日はいつもより静かだからじゃないか？風の音がよく聞こえる」
「そうか。だから君も眠れないのか？」
男は納得して呟いた。「いつもより寝返りが多いと思っていたんだ」
「あああ」とうめき声。「そうか、悪かった」
「いや。なんか久しぶりに会話をした気がする。自分が人間であることを思い出したよ」
しばらくの無言。
「・・・俺もだよ」

二日目。

http://pdr2.wakwak.com/~kiss_no/

「眠れないのか？」
上から下へ掛けられる声。
「ああ、眠れない」と男は返事をした。
「今日も静かだからな」
昨日と同じように自分の寝返りの音がうるさいのだろうと上の兵士は思って言ったが、男は否定する。
「そうじゃなくて・・・怖いのさ」
「怖い？」
窓から指す月明かりがぼんやり周りを照らしている。ぐるりと見渡せば膨大な数の二段ベッド。
二人の兵士は偶然にも同じように視線を辺りに向けていた。しかし思うところは別であった。
下のベッドの男は感傷的になっていた。この夜が妙に静かなのと、月明かりがきれいなのとで、心の奥がざわめいたらしい。

http://park2.wakwak.com/~kiss_co/

「自分の眠っている間に時が過ぎているなんて、考えると怖くならないか？」
知らぬ間に時が過ぎて、その間には何十万という人間が死んでいく。自覚がないまま、気づけば隣の人間も死体になっていて、己すら死んでいるのかもしれない。
そんなことを思っていた。
「妙なことを考えるな・・・？」
男の感傷は理解されなかった。不思議そうな声が上から下に向けられた。
「そうかな」
「そうさ」と素っ気無い。
「俺は逃げ出したいよ。一刻も早く眠ってしまいたい。夢の方がよっぽど平和で楽だからな。俺は・・・平凡でも争いの無い世に生まれたかった」
しんと静まり返った。ふと風が窓を叩いた。

http://park2.wakwak.com/~kiss_co/

「なあ」と男は上の人間に聞きたくなった。「もし俺が」
「何だ？」
「――なんでもない」

三日目。

「眠れないのか？」
「眠れないんだ」と男は答える。
「眠りたくないんじゃなくて？」
「そうじゃないよ、今日は」
今日は風が無い。ただ遠くで爆撃音。
そして、無数のいびき。
「死体を見たんだ」
その言葉に呆れた声。「俺なんか毎日見てる」
「俺ははじめてみた」
そう、初めて男は死体を見た。むせ返るような血の匂いも、こげた肉の匂いも初めて嗅いだ。それは、何ともいえない

http://park2.wakwak.com/~kiss_co/

光景で。
「そして感想は？」
上の兵士は問うた。男の声が恐怖に怯えているわけではないと気づいた為であろうか。
「興奮してるよ」と男は答えた。
「それはどんな死体だった？」
「どんな？」
「男か女か？」
「女さ」
「血はついていたか？」
「付いて流れていた」
「上半身に？下半身に？」
「・・・下半身」
「それは死体じゃなくて、肢体というんだ」
上の兵士は事も無げに言う。
「屍姦が好みか？」
「・・・試したことはないよ」

http://park2.wakwak.com/~kiss_90/

そして沈黙する。
「今度試してみたらどうだ」
上の兵士は言う。
「考えておくよ・・・」

四日目。
「眠れないのか？」
「ああ、眠れない」
「今日はどっちだ。怖いのか？興奮してるのか？」
上の兵士は問う。
「怖いんだ」
男は答える。
「例の時間の話か？」
「そうじゃないさ」
「ではなんだ」
「君の言っていた、平和を考えていたんだ」
男は神妙に言う。

http://park2.wakwak.com/~kiss_

朝から降り続いている雨の音が耳を打つ。
汗と泥と血が混じったような空気が湿り気を帯びて、更に兵士達を憂鬱にさせた。
男が尋ねる。それは質問であって独り言のようでもあり。
「平和とは・・・何だろうね」
「哲学？」
「そうじゃなくて」
「では、話しても無駄だな」
その声は熱を帯びていて男の疑問を切り捨てる。
「何故？」
「平和を感じたことの無い奴に、それを語る権利はないと言うことさ」
「君は知っているのか？」
男は静かに尋ねる。
平和というものを。その漠然とした、未知の世界を。

http://park2.wakwak.com/~kiss_co/

上から降ってきた声は、いつものように乾いていなく、空気も漏れていなかった。
「夢さ」
五日目。
「眠れないのか？」
「ああ、眠れない」
男は答えた。その声は高揚していた。
「今日は興奮しているな」
「分かるか？」
「分かるさ」
上の兵士は呆れながら言ったが、妙な予感がしていた。この戦場で興奮するような自体などそうそうないことは分かりきったことだった。
「実は、屍姦を試してみたんだ」
その台詞に上の兵士は一瞬絶句したが、冷静を装って尋ねた。「どうだった？」

http://park2.wakwak.com/~kiss_co/

「女というものは必要不可欠だというのが分かったよ」
男は応える。
「利口になったな」
「ああ。・・・今度は生け捕りにする」

六日目。
雨が降っていた。周りの兵士達のいびきが耳を刺激し、男は眠れなかった。否、それ以上に気になっていたのは静か過ぎる上の住人なのだった。
上のベッドには確かに気配が存在したが、いつもの声は耳に届かなかった。
男は寝返りを打つ。上の兵士の動きに集中する。寝返りの数、ひゅうひゅうと漏れる呼吸音に。
目がいつになく冴えていた。

七日目。

http://park2.wakwak.com/~kise_co/

「起きているか？」
男が上の兵士に声を掛ける。
「ああ、起きているよ」
ひゅう、と一つ呼吸が鳴った。
「怖くて眠れないんだ」
「なぜ？」
上の兵士は問う。
「君が昨日話しかけてくれなかったからさ。死んだかと思ってね」
否、本当は死んでいたなんて思わない。

知っている、上の兵士はずっと起きていた。己と一緒で相手の呼吸に神経を集中して、寝返りの数を数え、生きていることを確認し続けていた。そうじゃなければ狂いそうだった。けれど、また今。
「なぜ黙るんだ？」
男は沈黙を繰り返している上の兵士に、苛々とした声を出す。

http://part2.vakvak.com/~kiss_co/

「寝ろよ」
突き放した静かな声が返って来た。それは冷たく、まるで、真っ黒い穴が開いた死体に向けられているようで。
「できないんだ」
「じゃあ、口を閉じてろ」
「できない」
「なぜ？」
男はついに悲鳴を上げた。
「君に嫌われたくない」
「そうか」
「そうさ」
「・・・俺は女を犯す奴は嫌いだ」

八日目。
目を覚ますと、眩しい太陽の下、草原に寝転がっていた。青臭い緑の香り、肌を撫でる風。
上体を起こすと、遠くの方で虫取り網

http://park2.wakwak.com/~kiss_ao/

を持った子供が自分を呼んでいる。
耳にはつんざくような蝉の鳴き声が響いていた。
どこか懐かしい風景。けれども何か違う。
「これは嘘だな」
その呟きとともにに闇に戻る。
遠くの方で爆撃音が聞こえた。
「起きたのかい？」
下から声がした。
「ああ」
上の兵士は応える。
「眠っていたろう？」
「少しね」
「どうして起きたんだ？」
「嘘だったからさ」
「嘘？」
「平和がね」

http://park2.wakwak.com/~kiss_co

九日目。
「眠れないのか？」
上から声がする。
「ああ、怖いんだ」
男は震えた声を出す。
「どうした？」
「人を殺したんだ」
「俺は毎日殺してる」
上の兵士はつまらなそうに言う。
「俺は初めてだったんだ」
「そうか」
「そうさ」
男はうわ言のように続ける。
「子どもだったんだ」
「子ども？」
「女だった」
「・・・脱走したんなら仕方ないだろう」
上の兵士は言う。暗闇に兵士達の呻き声が混じっている。遠くの方で微かに悲

http://part2.wakwak.com/~kiss_ooo/

鳴が聞こえた。
「その女・・・・妊娠してたんだ」
「・・・そうか」
「臨月だったんだ」
「そうか・・・・」
上の兵士は同じ言葉を繰り返す。
「その死体をどうした？」
「皆が喰った」
「お前は？」
「食えなかった」
「俺なら喰うぞ」
上の兵士は囁く。「今度は喰え」
「・・・努力する」
十日目。
「起きているかい？」
男が声を掛ける。
「眠っている」
上の兵士は答える。
「今日も眠れないんだ」

http://park2.wakwak.com/~kiss_co/

「話しかけないでくれ」
上の兵士の声は珍しく苛々していた。
「何があった？」
男は問う。
上の兵士は低い声で言う。
「・・・味方を殺した」
男はそれを聞いて動揺した。「なぜ？」
「捕虜を犯していたからさ」
「それくらいで・・・」と思わず言った。
沈黙。
「お前も死ね」

十一日目。
空のベッドが目立つようになった。
月明かりに照らされる兵士達の顔は傷だらけで、誰かに呪われているような苦悶の表情を浮かべていた。
男はひとつ寝返りを打った。
上からは軋みが聞こえない。寝息も聞

http://park2.wakwak.com/~kiss_co/

こえない。
「なあ」
男は口を開く。
・・・返事もない。

十二日目。
「眠っているかい？」
男が声を掛ける。
「いや。起きている」
上から声がする。
「昨日はどうしたんだ？」
男は訊く。
「どうした、とは？」
上の兵士は聞き返す。
「いなかったろう？」
「あああ・・・」
上の兵士は気の抜けた声を出す。
「昨日は別のベッドにいたのさ」
「別？」

http://park2.wakwak.com/~kiss_co/

「手術台の上だ」
「・・・なぜ？」と思わず訊く。
「手が吹っ飛んだからさ」
上から感情のこもっていない声が返ってくる。
「右？左？」
「両方さ」
「両方？」
「もう戦場には行けない」
上の兵士の声が低くなった。
隙間風が甲高い音を立て、頬に冷たい空気が触れる。
男は震えながらも問う。
「どうしてそんな怪我なのに、ここにいるんだ？」
「捨てられたのさ」
「捨てられた？」
「もう俺は死人と同じだ」
上から聞こえる不気味なほど冷静な声。

http://page2.wakwak.com/~kiss_to/

「でも生きている」
「そうだな」
「呼吸もしている」
「ああ」
「俺と話もできている」
「・・・ああ」

十三日目。
「起きているかい？」
男が声を掛ける。
「痛くて眠れない」
上から声がする。
月明かりに照らされた多くのベッドは主人を失い、ただそこに存在し続けている。
いびきはほとんど聞こえず、隙間風も今日は音を発していない。不気味に静かな夜だった。
「何か臭わないか？」

http://park2.wakwak.com/~kiss_ao/

男はすんと鼻を鳴らして言った。
「俺が腐っていく臭いさ」
上の兵士は言った。
「冗談だろ」
「いや、本当さ」
「軍医にいったほうが」
「行きたくないんだよ」
「なぜ？」
「医者が嫌いなんだ」
「なにを馬鹿な！」
男は思わず声を荒げて身を起こす。
ぼそりと上の兵士が何か言った。
「人間のまま死にたい」

十四日目。
「眠っている？」
下から声がする。
「いや、眠れないんだ」
上の兵士は呟いた。最近、ベッドの柵

http://park2.wakwak.com/~kiss_eo/

に刻まれた言葉がいやに目に付くようになっていた。
我が国家に栄光あれ！
前の使用者の最期の言葉。
我死するも魂は永遠なり！
その前の使用者の言葉。
さらに前の、ずっと前の、前の、前の、前の、・・・。
ベッドの枠や壁にびっしり刻まれている呪いと賛歌。
「お願いがあるんだ」と下の兵士に言う。
「何だ？」
「君の顔が見たい」
「今更なぜ？」
戸惑ったような声がした。
「今だからさ」
上の兵士は言う。視線をベッドの柵から強引に引き剥がす。
「明日」と口から言葉が出た。

http://park2.wakwak.com/~kis_o/

「明日？」
「ナイフを持って来い」
「ナイフ？」
「・・・そうしたら――」

十五日目。
下に寝ているはずの男は、左手にナイフを持ち、二段ベットの梯子に片足を乗せていた。
「来いよ」と上から誘う声がした。
梯子を三段ほど上ると、人影が見えた。
月明かりがその人物を不気味に照らしていた。
常に自分の上から語り掛けてきた兵士は、白い壁に寄りかかり、黄ばんだ包帯の間からこちらを見つめている。
「初めましてというのはおかしいな」
包帯の向こうでそう笑ったらしかった。
男は梯子を上り詰め、対峙し、無言の

http://park2.wakwak.com/~kiss_co/

ままナイフで包帯に切れ目を入れた。
全身を解包すると、焼け爛れた肉体がそこにさらけ出された。
両腕なし。右足なし。
「医者は嫌いなんだ」
瞳をぎらつかせてそれは言った。血走った白目ばかりが闇に目立っていた。
「俺は人間だと思うか？」
肉塊はそう尋ねる。
瞳がまるで生きているかのように濡れていた。肉塊がまるで意思があるように震えていた。
「怖いんだ」とナイフを持ったまま呟く。
「怖い？」
「・・・君が怖い」

十六日目。
下に寝ているはずの男は、じっと何かを見つめていた。

http://park2.wakwak.com/~kiss_soft

彼の目の前には、目にナイフが突きたれられた死体がある。壁には血糊がつき、目からは赤い筋が流れていた。

朝日が差し込んでゆく中、男はゆっくりと頭を垂れる。そして、彼女の唯一きれいな左の乳房に歯を立てる。

彼女の肉を口に含み、男はナイフをゆっくり抜いた。

ずるりと死体が壁を滑る。

男は白亜の壁に咲いた深紅の華を見た。それは朝日に照らされて、てらてらと濡れている。

「あ、」

男は動きを止めて耳を澄ました。

「ねえ、今、蝉の鳴き声が聞こえなかった？」

・・・返事は無い。

男は笑った。

http://park2.wakwak.com/~kiss_cut/

了

http://park2.wakwak.com/~kiss_co/